

知多半島ケーブルネットワークコミュニティ誌 [ココナッツクラブ]

# COCONUTS CLUB

January 1  
2020

須佐から豊浜に彷徨いてく歩いて探る、地名の謎其の二



す さ  
須佐から

豊浜に

さまよ  
彷徨いて

歩いて探る、地名の謎

其二

今回はめでたい正月にちなんで、  
南知多の「鯛の町」にクローズアップ。  
万葉のロマン漂う須佐の面影を探しながら、  
愛知県随一の漁師町として名高い豊浜を、  
時空を超えて歩いてみる。



大正時代の豊浜周辺の地形図に、現在の海岸線(—)と防波堤(—)を重ねてみた。入江には「須佐湾」の文字が見えるが、現行の地形図には「豊浜漁港」と記される。(大日本帝国陸地測量部「師崎」1:25,000 / 大正7年測量、大正9年8月30日発行)

### 出掛けていた神が帰る日

10月31日木曜日、間もなく午前0時を迎えようとする頃。豊浜の町はずっかり寝静まり、街灯だけが点々と道を照らすのみ。しかし、町はずれの山際にある須男神社だけは、境内の灯りで社叢がほのかに浮かび上がり、人の気配があった。

参道の坂道を登ると、年季の入った木造の社務所に十数人の男たちがいた。今日は「神迎え」の日。出雲大社に出掛けていた神様が豊浜に帰ってくるので、それを出迎えるために集まってきたのである。10月は、全国の神様が出雲大社に集う神無月。須男神社の神様も例外ではない。10月1日に「神送り」の神事で送り出され、二か月間出雲大社に滞在。そしてこの日の真夜中、「神迎え」の神事を執り行っている須男神社に戻ってくる。

10月の下旬には、豊浜のあちこちに神社への参集を呼びかける案内が貼り出されていた。また、神事に先立つ午後9時頃には、若い衆が集まって神様の帰還を喜ぶお囃子が奉納される。神送り！神迎えは全国的に行われてきた風習だが、今、このようにして深夜の神社に氏子が集まり送り迎えをしているところは、知多半島ではほとんどないのではないだろうか。

境内はひんやりした秋の夜の空気に包まれ、海の方からは時折、闇の海に出漁する漁船のエンジン音が聞こえてくる。高台にある拜殿では宮司が肅々と祝詞を奏上し、いつしか0時を回ろうとしていた。10月31日から11月1日に日付が変わったその瞬間、神社を包み込む木々が「瞬ざわ」とした。

神様は無事、神社に戻ってきたようだ。心なしかな安堵の表情を浮かべた男たちは拜殿からぞろぞろと出てくると、ひとしきり社務所や境内の後片付けをしたのち、三々五々、自宅へと帰ってゆく。

秋の夜の漁師町で厳かに行われた、あつという間の神事だった。

\* \* \*

須男神社。少し不思議な字面と響きだが、これは明治4年(1871)からの呼び名で、古くは「須佐男(神)社」と称していた。こう聞くと、神話に登場する須佐之男命を思い浮かべるが、須男神社の祭神は日本武尊であり、須佐之男命ではない。

では、古い社名の「須佐男」はどこから来たのかというと、豊浜の旧名「須佐」が由来なのではないかと考えられる。

とは言うもの、そもそも須佐と聞いてピンとくる人が地元以外にどれだけ

いるだろうか。豊浜に暮らす多くの人々にとつては、今もこの地が「須佐」であるとの認識があり、夏恒例の盆踊りは「豊浜須佐おどり」と呼ばれて踊り継がれている。しかし、今の地形図にはどこを探しても載っていないこの地名を、地元以外の人が見聞きする機会はずくないのではないか。

神話の神を想起させる須佐の名は、どこか謎めいている。「説には、古代、この地を開拓した一族「須佐連」に由来し、須男神社は一族の祖神を祀ったことが起源とされている。須佐連がどういう一族でどこからやって来て、なぜここに辿り着き腰を落ち着けたのか。どこにも書かれていないので詳しいことは分からないが、そんなミステリアスなところにもそえられる。

### 詠まずにいられないその景色

狭義の須佐は、豊浜市街地を成す半月・中村・鳥居・高浜・新居を指し、古くは須佐の中心の意味で「本郷」とも呼ばれた。また広義の須佐は、須佐本郷に中洲(中須・初神(椒)・小佐を加える。須佐の名の起源は定かではないが、古くからあったことは確かだ。もともと早くその名が登場するのは奈良時代(710〜794)末期に成立したとされる万葉集で、次の一首が収められている。

味鴨の住む須佐の入江の荒磯松  
我を待つ児らはただ一人のみ(巻十二)

味鴨のすむ渚沙の入江の隠沼の  
あないきづかし見ず久にして(巻十四)

これは二首とも恋の歌だ。鴨が想う須佐の入江、その浜辺で若い男が穏やかな海を眺めながら愛する人への募る思いを呟いたのだろう。須佐という地名は各地にあり、実はこの歌の舞台がどこであるかを示すものはないのだが、古くから南知多の須佐であるとの学説が一般的なので、素直に受け入れておこう。

今の豊浜には砂浜がなく入江のイメージもないが、漁港が整備されるまでは弓のような浜辺が広がり、万葉集の世界に浸れそうな風景が広がっていたという。P.05の古写真の風景がそれ。高浜の極楽寺から土御前神社にかけての山上から北方向を見た風景だが、家並のすぐ前まで海岸線が迫っているのがわかる。波打ち際に二人佇んで恋人や妻のことに思いを馳せれば、自然と歌も浮かぼうというもの。現代ならば、スマホで写真を撮って歌とともにインスタグラムにでもアップすれば、瞬く間に大量の「いいね！」を獲得しそうだ。

万葉集に登場したことで「須佐の入江」は歌枕となり、以後の歌集にも須佐

## 万葉つたえて荒磯の松に、 いまも昔の風が吹く

(太田照實作詞「豊浜音頭」より)



大正時代に撮影された須佐湾の全景。写真の左奥、半月地区の地先に明治45年(1912)築造の防波堤が見える。(写真提供:南知多町教育委員会)

の入江を詠み込んだ歌が収められた。そんな須佐は、以来、知多半島でも屈指の風光明媚な地として知られたという。ただ、歴史系の話題やレジャーの適地が若干手薄だったためか、あるいは漁業が盛んで他のことに力を注ぐまでもなかったのか、大正時代に内田佐七による観光開発が始まった後も、内海、師崎、篠島、野間ほびクロスアップはされなかつたようだ。

ちなみに、大正13年(1924)に刊行された『知多半島風物誌』には、次のように記されている。

町の要部は須佐と称し、半円形をなす海に面せり。板子一枚の家業は江戸っ子の気風を移し、あらば即ち飲み、所謂宵越しの銭を持たぬ風習あり。人情は概して質朴なり。(句読点筆者)

これを書いた記者は、風景よりも漁師町らしい気質に感銘を受けたか。

### 貝がら公園から絶景哉！

本誌2018年9月号「歩いて探る、地名の謎」でも少し触れたが、豊浜の名が公式に登場するのは明治11年(1878)のこと。明治政府が地方制度を整備するため「郡区町村編成法」を布告した際、須佐村と中須村が合併して二つ

の自治体を置くことになり、その新しい村の名前として採用されたのが「豊浜」だった。

豊浜がどこから出てきたのか、詳しいことは記録がないのでわからない。明治時代にはここに限らず全国各地で合併新村が誕生し、新しい地名が次々に創出されていた。特に愛知県では「豊」を頭に付けた町村が多く、ちよつとした豊ブームの様相を呈していた。豊浜も、誰か偉い人が思い付きで命名したのではないか。別に須佐村としても問題はなさそうに思うのだが、古来の地名が否定されたのは、江戸時代までの村落を解体し中央集権化を目指していた明治政府の意向を付度した人がいたのかもしれない。

とはいえ、豊浜という地名も悪くはない。豊は「豊漁」に通じ、半島屈指の漁師町であることをストレートに表現している。気風がよく、進取の気性に富んだ須佐の人たちも、風雅で神々しい響きを持つ「須佐」に愛着を持ちつつ、「豊浜」を受け入れたような気がする。須佐と豊浜は表裏一体だ。

須佐・豊浜の全景を眺めようと、豊浜北部の高台にある「貝がら公園」に登ってみた。こは、日和山に祀られる白山神社を中心とした、昭和の南知多を代表する観光スポット。半月の漁師山本祐一が、昭和30年(1955)から独力で

造成整備した私設公園である。かつては町や名鉄も盛んにPRし、昭和の終わり頃までは観光客が押し寄せたという。園内には貝殻を使った摩訶不思議な造形物がそこかしこに据え置かれ、令和を生きる我々は戸惑わずにいられない場所だが、南知多の観光史に刻まれる二世を風靡した施設であり、いわば「昭和の遺跡」と言えよう。

約75メートルの標高からは豊浜を一望できる。背後の山並みはまるで大きな懐の如し。母の胸にすっぽり抱きかかえられたかのような町と港には、雨上がりの風が渡り、やわらかな秋の陽光が降り注ぐ。なんと穏やかな風景か。

須佐という地名は、冬の強い北西風で海が荒れずさぶことが由来という説もある。鈴鹿山脈から吹き降ろしてくる風は冷たく厳しく、海が時化る日も確かにあるが、この目のような平穏な海を眺めると、なにもそんな悪天候由来の名を土地に与えることもなからうと思う。なので、個人的にはこの説は却下したい。

須佐には、突き出た地形を意味する「スサ(寸佐)」「スサキ(洲崎)」に由来するという説もある。海に突き出た須佐東西の崎を見ると、それが一番しっくりくるような気がする。

### そして鯛の町になる

須佐の入江こと須佐湾が「豊浜漁港」へと大きく変貌することになったのは、昭和26年(1951)より国の主導で始まった第一次漁港整備計画に、豊浜漁港が採択されたことによる。この計画に基づく事業によって埋め立てが進められ、港湾機能が整えられていった。昭和34年(1959)の伊勢湾台風をきっかけとする高潮対策も含めて豊浜漁港の整備計画は第六次まで段階的に進められ、昭和55年(1980)、ようやく現在の姿になった。

長らく観光面に力が入られてこなかつた豊浜にも、漁港の整備を機にようやくスポットが当たるようになる。昭和61年(1986)、豊浜魚ひろばがオープンしたのだ。

それ以前の南知多みやげといえば海老煎餅か和菓子屋による地元銘菓が中心で(本誌2014年7月号「みやげ話に花が咲く」参照)、県下随一の漁業地が控えていながら魚介類が持ち帰られることはあまりなかった。そもそも昭和の終わり頃は消費者の魚離れが進んでおり、その一方で輸入水産物の増加により魚の価格が低下するという、漁業が大きなピンチを迎えていた時代。魚ひろばは、その打開策として誕生したのである。

場内には小売店と飲食店が連なり、観光シーズンや土日ともなると大

## 須佐のみなとは遠浅なれど、わしとあなたは深い仲

(「豊浜須佐おどり」の歌詞より)



勢の人で賑わいを見せる。バブルの後、来客数売上高が急減して苦労した時期もあったが、現在は安定的な人気を保っているようだ。新鮮な魚貝や上質な加工品が安価で購入できる魅力はやはり大きい。

豊浜といえはやはり鯛のイメージだ。魚ひろばの上屋の屋根には、巨大な鯛が乗っている。これは、津島神社の祭礼「豊浜鯛まつり」に登場する巨大な鯛みこしを模したモニュメント。豊浜漁港で鯛の水揚量が突出しているわけではないが、魚ひろばで鮮魚を扱う「おわせ川栄」の大きな売り台に大ぶりの鯛がずらりと並ぶ様はなんとも華やかで、豊浜らしい。

豊浜で買える土産物といえは、魚貝のほかに「たいばい」がある。これは昭和5年(1930)頃に創業した永和堂製菓舗が手掛けている洋菓子。ふっくら厚くてさくさくしたパイは鯛の形をしており、鯛まつりのリアルな鯛みこしと比べると癒し系の顔立ちが可愛らしい。味は粒餡・林檎・チョコの定番のほか、旬の素材を使った季節限定モノも用意している。

現店主の齋藤慎也さんに聞くと、たいばいを考案したのは先代の銀宏(かぬひろ)さんで、豊浜魚ひろばができる少し前のこと。当時武豊町にあった平安殿からのオーダーで、結婚式の引出物として鯛

型のアップルパイを作ったことがきっかけだった。それは今のたいばいより二回りほど大きいサイズで、新郎新婦からも好評だった。これを買いやすいサイズに

すれば新しい豊浜名物になるのでは、と考えた。

以来三十数年、今やたいばいは豊浜の定番土産になった。見た目にもめでたい

感じだし、家族や親戚が集まる正月のお茶請けにぴったりではないか。神輿といは鯛魚といは菓子といは、豊かな浜には鯛がよく似合う。

## 豊浜よいとこ一度はおいで、 出船入船大漁ふね

(太田照實作詞「豊浜音頭」より)



〈取材協力〉須男神社／豊浜魚ひろば／おわせ川栄・前田隆晴さん／永和堂製菓舗／ゲストハウスほどほど  
〈参考文献〉尾張地名考／知多郡史／角川日本地名大辞典23愛知県／南知多町誌本文編